博士論文（要約）

〈サラリーマン〉の文化史

近現代日本社会における安定への欲望をめぐる考察

鈴木貴宇

本論文の第一義的な目的は「サラリーマン」 と称されるホワイトカラー層の一形態が、近現代の日本社会において、いつ、どのように形成され、定着を見たのか、そしてそこに反映された社会構造についての考察を進めていくものである。その際に、サラリーマンが生きた各時代の社会状況において、どのような心情が文化表象に反映されてきたのかを明らかにしていく。ここで言う文化表象とは、具体的には写真、漫画、映画、流行歌、そして文学作品などを含むが、その中でも本論では文学作品の中に描かれたサラリーマンの分析に重点を置く。文学作品という虚構の背後にある社会状況をサラリーマンの視点から読み解いていくことで、かつて「一億総中流」 と言われ、その象徴として「安定と平凡な家庭生活」の代償に働き続けたサラリーマンたちの表情が、各時代を生きたリアリティを伴って浮かび上がらせることを企図している。以下、各章の概要を記す。

序章「〈サラリーマン〉をめぐる言説：あるいは彼らはどこから来たのか」において、「サラリーマン」という階層と用語の生成および浸透過程を先行研究の紹介と併せて説明する。本論の題名にもある「文化史」というアプローチを採択することで、従来の「サラリーマン研究」が触れてこなかった「描かれたサラリーマン（表象）」と実態のズレ、またそうしたズレに込められた様々な心情の分析がどのように可能かという視角の提示を行う。

第一章「〈サラリーマン〉前史としての 1870 年代から 1910 年代：士族たち、立身出世主義、そして煩悶青年」は、日本の近代化が幕を開け、株式会社の誕生といった資本主義体制の黎明期とも言える 1880（明治 20）年代から 1910 年代を扱った。この時期にはまだ「サラリーマン」という用語は登場しておらず、また就業人口も稀少なため、官吏（役人）と実業家の表象分析が中心となっている。教育制度の完備が急務とされた当時、地縁や血縁から切れた青年たちが「東京」へと流入し、やがては可視化された近代の表象として定着する過程を追う。

近代とは出自に関わらず、個人の選択による職業と移動の自由が保障される時代に他ならない。「文明開化」の語が象徴するように、黎明期の近代を生きた人々にとってそれは未知の世界に開かれることとして感受され、その光を追うことは「都会」すなわち「東京」への移動によりなされるとされた。そこに託された階層上昇の野心と、その実現のために捨てた故郷に代わる新しい帰属先として「家（家庭）」が前景化することになる。日本社会におけるこうした「成功」へのエートスを中心としたイデオロギーが「立身出世主義」であり、ここにおいて公的な成功と私的領域の充足が結託を見る。

近代文学のはじまりとされる二葉亭四迷『浮雲』の主人公、内海文三の挫折は、公私の一方が欠けたら「立身出世」の物語を生きることはできないという、当時の青年層に共有されたオブセッションを描いたものであった。失職は近代社会を生き抜くために必要な「男性性」の喪失であり、下宿先の二階の部屋から出ることのできない文三の姿は、「零落への不安」（竹内洋）を体現するものでもあった。内省にとらわれた文三の在り方は、昭和モダニズム期の〈サラリーマン〉に残響していくことになる。

第二章「ベル・エポックあるいは小市民のユートピア：「文化住宅」という装置と大正時代のサラリーマン」では、ヨーロッパで起きた第一次大戦の影響で、急速に訪れた軍需景気の結果、株式会社の増加と東京駅の開業（1914 年）に代表されるように、スーツを身に着け郊外の「文化住宅」から丸の内の会社へと通勤する、といった今日のサラリーマンのプロトタイプが出現した 1920（大正 9）年前後を見ていく。「サラリーマン」という用語もこの時期からわずかながら使用が見られ、民間企業の台頭が大正期の文化に与えた影響にも触れた。文学作品

でも岸田國士が若いサラリーマン夫婦を題材とするなど、今日の〈サラリーマン〉イメージの定着がこの時期に定着を始める。岸田の戯曲『紙風船』分析を通じて大正期の「文化」への憧憬が続く昭和初頭の「モダン・ライフ」に引き継がれていく様態を扱った。

日清・日露戦争の勝利を経て、資本主義化の勢いが加速した 1910 年代から 1920 年代にかけての大正期は、株式会社の増加によるサラリーマン層が社会的に認知されていく時代である。それはまた、サラリーマンという用語の登場がロシア革命の起きた 1917（大正 6）年以降に確認されることからもわかるように、〈サラリーマン〉はその登場時から日本の動向が世界史的な文脈を有する事態と同伴していた。第二章では、前章にて抽出した「家（家庭）」を希求する心性が、より直截に「文化住宅」という消費対象としての西洋に向かい、その住人となることで「近代家族」の構築も果たそうとするサラリーマンの精神構造を分析した。岸田國士の戯曲『紙風船』に登場する若きサラリーマン夫婦の困惑は、婦人雑誌や新聞といった出版ジャーナリズムを流通する〈サラリーマン〉と、自身たちが生きる現実とのズレに起因する。社会的規範像としての〈サラリーマン〉は大正時代の後半に成立したとの結論に至った。

もう一つ、大正期のサラリーマンを考える上で重要なトピックは、第一次世界大戦後の経済不況により露見した日本資本主義の構造的な脆弱さに対し、1910 年代より知識層に浸透しつつあった社会主義思想を以て、労働者階級に属する階層としての運動も、少数ながらサラリーマン層が展開することだ。没落するインテリという階級史観に悩む〈サラリーマン〉は、昭和モダニズムの時代に連続していく。

関東大震災（1923 年）と深刻な経済不況で始まった昭和初頭は、今日「モダン都市東京」（海野弘）の用語で知られる都市大衆文化の爛熟期でもあった。そしてこの時代に入って、大卒出のサラリーマンも人口構成上の厚みを増し、用語も定着している。**第三章「蒼白きインテリたち：モダンボーイ・マルクスボーイ・サラリーマン」**では、昭和モダニズム文化の文脈においてサラリーマンがどのように描かれ、また激化する階級闘争の中で「青白きインテリ」としての自責を抱えながら「モダン・ライフ」を牽引していったダイナミズムを論じた。モダニズム文化の書き手の一人、浅原六朗に代表される〈サラリーマン〉を主人公とした小説も多く発表されており、イデオロギー闘争と日本社会の軍国主義化が年を追って濃厚となる時代に、サラリーマンがどのような思想を胚胎させていたのかを考察した。なお本論文は基本的に通史的な叙述を採択しているが、日中戦争から太平洋戦争開戦に到る「戦中期のサラリーマン」については、分析を断念せざるを得なかった。その最たる要因は、「第二次世界大戦」という世界史的な問題を一つの章にて論じることの無謀さと、「サラリーマン」が総動員体制下に編成されることで、「軍隊」という組織の一員に組み込まれていく過程の複雑さの二点である。しかし、戦時体制下のサラリーマンを論じるにあたり、有効と思われる論点の指摘までは辿り着くことができたため、本章にて補足のかたちではあるが、戦中期のサラリーマンについても言及した。

関東大震災とそこからの復興で幕を開けた昭和初期は、サラリーマン層により担われた文化的側面が開花する時代である。もっとも、この時期に隆盛を見たマルクス主義の観点からすれば、サラリーマン層は「エロ・グロ・ナンセンス」の流行語で知られる、徒花的な都市消費文化の追随者にして、その享楽によって戦時下の社会不安からの逃避をはかる「蒼白きインテリ」のヴァリアントに過ぎない。しかし、本章で示したように、中村正常や浅原六

朗ら新興芸術派に属する作家たちは、左傾へと踏み切れない自らの小市民性に葛藤するサラリーマンや、地縁血縁から切れた新しい共同体を営むモダンガール、モダンボーイとの接点を持つサラリーマンを描くことで、「無思想な消費文化享楽層」や「近代家族」に回収されない単身者性を指摘した。これは日本モダニズムの思想的側面とされる、性の解放をはじめとする封建思想の打破が、昭和初期の〈サラリーマン〉を担い手に萌芽を見ていた可能性を伝えよう。

モダニズム風俗の一翼とされる「エロ・グロ・ナンセンス」は、規範的な性意識――異性愛主義とも言える――を相対化する傾向も有していた。本章で論じた堀辰雄の初期作品はその具体例である。明治期の内海文三以来、男性性の喪失をいわば「インテリ性」により補填してきた〈サラリーマン〉は、明示的な「男らしさ」の規範には回収されない表象であった。補説的に戦中期のサラリーマンとその特徴を論じたが、総力戦体制に動員されることで生じた最大の変化は、強制的平準化によりもたらされた階級の消滅と、サラリーマンも「戦う兵隊」に編成されることで、攻撃的な男性性を回復するプロセスにあると考えられる。この平準化を経たことで、戦後の高度成長を支えた日本的経営と、それを可能とした性別分業制も十全に機能したと考えられる。

第四章「戦後民主主義の恋愛：敗戦後のサラリーマンたち」は敗戦を経て、サラリーマンがアメリカの民主化を大衆的な位相で象徴する存在として描かれる様相を扱った。高度成長前夜でもある 1950 年代初頭に、サラリーマン小説の代表作家として源氏鶏太が人気を集めるが、そこに登場するサラリーマンたちが戦前の彼らとどのように異なるのか、また労働組合運動の過熱化といった歴史的現象を大衆文化はどのように捉えていたのかを雑誌等の資料から明らかにした。その結果で明らかとなった点は、この時期に「専業主婦とサラリーマンの夫」による核家族への欲望が「会社」に託され、それが源氏の小説では「社内恋愛」の推奨として処理されたということである。

敗戦を経て、連合軍による占領期を経験する 1945 年から 1950 年代初頭を扱った本章では、近代日本を心的に統合した「大日本帝国」の崩壊と、その空洞を埋めるべく「敗戦」の表象を持たない〈サラリーマン〉が、主に大衆文化の位相にて確認できる様態を論じた。占領が終結した 1952 年にヒットした菊田一夫によるラジオドラマ『君の名は』と、「サラリーマン小説」というジャンルの第一人者となる源氏鶏太『三等重役』を同時代的な文脈で解釈する作業を通じ、明らかとした点は次の二点である。第一に、サラリーマンが民主化のフィルターを通過することで、そこにはアメリカ的な価値観を反映する「核家族」 への憧憬が、サラリーマンを夫とすることで実現できると当時の女性たちに感受された点だ。『君の名は』のヒーロー、後宮春樹はその中から造形化された。第二に、財閥解体といった企業民主化により、社内恋愛が少なくとも表向きはタブー視されなくなった結果、同僚の男性社員と結婚することで女性社員は退職後も「福利厚生」の恩恵のもと、夫の仕事と、その出世をサポートする「専業主婦」としてのライフコースが開示された点だ。「サラリーマンの夫に専業主婦の妻、二人までの子供」を「標準世帯」とする価値観は 1960 年代に定着するが、その布石は占領期にあったと言える。

第五章「家庭の組合のはざまで：銀行における労働組合活動を事例として」では、高度成長が本格的に始動する以前の 1950 年代に焦点を当て、その中でも戦前は展開され得なかったホワイトカラー層による労働運動の事例として、銀行における労働組合とその文化活動を取上

げる。サラリーマンを通史的に見ていくと気が付くことは、時代は変われどもその存在は常に「個」として生きたいとする欲求と、「集団」の中で規範を守らねばならないことの葛藤にさらされていることだ。その間をつなぐ中間集団として、戦後の民主化により全産業的に組合活動が活況を呈するが、銀行という資本主義経済の中核に位置する組織で展開された運動には、ホワイトカラーである自らのアイデンティティを問う試みも含まれた。それは「組織」と「個」という普遍的な問いが集約して現れる場でもあったことを確認していく。特に本章では、銀行労働に従事した女性行員たちの営為を扱うことから、日本社会における「労働」の在り方がどのように体現されるのかという問題に関し、ジェンダーの観点から相対化を試みる ことになる。

この時期は、高度経済成長期へ収斂する戦後秩序体制の「過渡期」とされ、 その様態はサラリーマンをめぐる状況にも反映している。1950 年代半ばまで全産業的に過熱化を見た労働組合組織の結成は、現実的な社会変革の可能性と、その主体としての参与がサラリーマン層にも信じられていたことの証左でもあった。本章では銀行労組を横断する統一組織の役割を果たした全国銀行従業員組合連合会（全銀連、のちに銀行労働研究会＝銀労研）とその機関誌『ひろば』を対象とすることで、企業との一体化に収斂することなく、戦後社会の構成員という自覚を持ったホワイトカラーの登場を考察した。全銀連が展開した文化運動は、その主要な参加層に女性行員が多かったことも、この時代の過渡期性を象徴しよう。続く高度成長期は〈サラリーマン〉を「働く男」に限定していくが、1950 年代から 55 年にかけては、まだこの規範的作用はさほど強いものではなく、戦時労働力として社会進出を果たした女性たちもサラリーマンならぬ「サラリーガール」として、発言を行っていた。

『ひろば』の誌面からは、性別分業制のジェンダーバイアスに編成される以前の女性ホワイトカラー労働者の声を聞き取ることができる。そして、彼女たちの声からわかることは、戦後の民主化がもたらした職場の平等処遇はあくまでも「日本人の男性で正規職員」を対象としており、女性や臨時職員、また在日韓国・朝鮮人は対象外であったということだ。差別撤廃をうたう組合にあっても、この点は変わりなかった。『ひろば』創刊に至る経緯は、銀行で働く女性たちが組合員となる権利の獲得と、自分の言葉で「働く女性」というアイデンティティを言語化していくものでもあったと言える。性別問わず、戦後民主主義を生きる「個人」という側面を、サラリーマン層であるホワイトカラーがもっとも強く打ち出すことのできた時代は、1950 年代初頭に求められるだろう。

終章「漂泊への決別、あるいは「平凡なサラリーマン」として生きることの覚悟：山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』論」では、1960 年代の日本社会に起きた階層変動とサラリーマン表象の変容を中心に考察する。本論文を通じての最終章でもある本章では、高度経済成長期を生きたサラリーマンの中でも、「戦中派」とされる世代に属する層に注目することで、前章で見たような多様な動きが「マイホーム主義」に代表される私生活中心主義へ収斂し、また〈サラリーマン〉が「平凡な現代人の普遍的な運命」（見田宗介）を含意するに至った社会構造の分析を行った。山口瞳の小説『江分利満氏の優雅な生活』を事例に、「ありふれたサラリーマン」の心中に隠された戦争による傷痕の存在、そしてそこからの再生が「平凡な勤め人(エブリマン)」となることで企図されていた点を考察した。1960 年代は高度経済成長の最中であり、サラリーマンの就業人口比率も飛躍的に増加を見る。団地生活を経てマイホーム取得へ、という土地家屋所有への欲望が顕著となるこの時代、サラリーマンたちは「未来への投

資」として子供と家族に安定を与えるため、また「敗戦」の記憶から遠ざかるため、自身の閉塞感を封じこめて働いた様態を見ていった。具体的には山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』分析が主となるが、流行歌や映画を補助的資料に用いて「遠くへ行きたい」という隠された願望について論究した。結論部では、前章までの記述を踏まえて全体の要諦を概観した上で、今後の展望と併せ、本論文では考察の対象とすることができなかった 1970 年代以降の「サラリーマン」について、現時点での論点の整理を行った。

初出一覧

【序章】

第一節　書きおろし

第二節　「研究動向　サラリーマン」（『昭和文学研究』第 61 集、2010 年）を改稿

第三節　書きおろし

第四節　書きおろし

【第一章】　全章書きおろし

【第二章】　全章書きおろし

【第三章】

第一節　「眠らない街の眠たい男　堀辰雄の『モダン東京』」（『国文学　解釈と鑑賞』別冊「堀辰雄とモダニズム」至文堂、2004 年）を改稿

第二節　「サラリーマンとモダンガールの恋　昭和初期のモダニズム文学に見る洋装表象」（服飾文化共同研究拠点事業報告書『近代日本モダニズム芸術とファッションについての研究　1910 年代 - 1930 年代を中心に（代表研究者五十殿利治）』文化ファッション研究機構、2013 年）を改稿

第三節　「青空と自殺　1930 年前後の〈サラリーマン〉試論」（大衆文化研究会編『大衆文学の領域』2005 年）を改稿

【第四章】

第一節　書きおろし

第二節　「『忘却』の記憶　菊田一夫『君の名は』における『東京』」（『昭和文学研究』第 52 集、2006 年）を改稿

第三節　「『明朗サラリーマン小説』の構造　源氏鶏太『三等重役』論」（『Intelligence』第 12 号、2012 年）

【第五章】

第一節　「パトスとしての文壇　『巴里会』と組合文化運動を事例として」（『文学』岩波書店、2016 年 5 月）を改稿

第二節　「銀行労働運動における機関誌の意義と考察　機関誌『ひろば』を事例として」（『Intelligence』第 18 号、2018 年）

第三節　「詩を書く銀行員たち　『銀行員の詩集』試論」（坪井秀人編『戦後日本を読みかえる　第三巻』臨川書店、2019 年）を改稿

【終章】　全章書きおろし